

考古かながわ 第12号

1997年3月31日

神奈川の考古学 — 1996年の調査から —

神奈川県考古学会監事

伊 東 秀 吉

近年、全国各地で遺跡の調査が進むにつれて、考古学の定説を覆すような発見が相次ぎ、そのつど新聞やテレビで大きく取り上げられてきた。昨年だけでも、青森県三内丸山遺跡をはじめとして、38個の銅鐸を出土した鳥根県加茂岩倉遺跡、年輪の年代測定によってこれまでの弥生時代編年に疑問を投げかけた大阪府池上曾根遺跡、三内丸山遺跡に匹敵する縄文中期の大集落が発見された北海道南茅部町大船C遺跡、車輪石・鋏形石・石釧など約140点の腕飾類が出土した奈良県鳥の山古墳等々、話題となった遺跡は多数にのぼる。

神奈川県内でも、上記の遺跡ほどの華やかさはないにしろ、毎年県内各地の遺跡調査で着実に成果を挙げてきた。ここでは、昨年新聞等に報じられた遺跡調査の中から、注目されるものを三例ほど取り上げてみよう。

藤沢市用田バイパス遺跡群から、旧石器時代の木材片が発見されたというニュースが、昨年11月の新聞誌上に載った。この遺跡群は、1994年春から調査が続けられており、これまでに旧石器時代から江戸時代にかけての遺構や遺物が大量に検出されている。

問題の炭化材は、現地表から2.5～3 m下の旧石器時代後期の地層から発見されたと伝えられている。柱のように直立した状態で出土した炭化加工材は、高さ9 cm、幅12 cm、厚さ3 cmの板状で、人工的に割ったと思われる鋭い面をもっているという。その下か

らは、深さ約40 cmの円錐形のピットが確認されている。この加工材の周辺からも、約1.3 m²の範囲にわたって炭化材が散乱していたというから、何らかの木造施設の存在を窺わせる。

本来、酸性の強いわが国の土壌では木材の遺存は難しく、これまでに旧石器時代の木材の発見例は極めてまれであるだけに、今回の資料は貴重なものといえよう。しかも、加工材が検出されたことは、この時代の木造施設の構築法を検討する上で、極めて重要と考えられる。

昨年夏に調査の行われた平塚市坪ノ内遺跡からは、東西径12 m以上、南北径5 m以上の長大な竪穴からなる鍛冶工房跡が発見された。竪穴内からは、著しく重複した状態で約70基の鍛冶炉が検出されている。このような大規模の工房跡は、常陸国国府所属の工房とみられる鹿の子C遺跡、下総国府の一面を占める和洋学園国府台キャンパス内遺跡などに類例を求めることができる。いずれも官衙関連の遺跡で発見されており、本遺構も相模国府（大住国府）の官営鍛冶工房跡であったと推定される。

海老名市の相模国分寺の調査では、これまで未確認であった「僧房」の位置が明らかになった。東西径96 m、南北径6.6 mの長屋造りで、8部屋から成り、一部屋の広さは18畳と推定されている。未確認として残る建物は、経堂・鐘堂・南大門の三伽藍で、相模国分寺の全容解明が待たれるところである。

鶴田栄太郎と下寺尾寺院跡

鶴田栄太郎は、茅ヶ崎市円蔵に1888（明治21）年3月19日に生まれた。44歳の時、1932（昭和7）年に石野瑛の主宰した「史蹟めぐり同好会」に加わり、会誌「相武研究」の編集、庶務会計主任となり、郷土史の研究に情熱を傾けた。1956年には現在の茅ヶ崎市郷土会の前身、茅ヶ崎郷土研究会を同志とともに設立している。

1941年にその史蹟めぐりの第100回と第101回を市内で実施し、あわせて石野瑛らによる講演会を開催し、「相武研究」誌に「相模茅ヶ崎史観」をまとめ、史蹟の保存を訴えている。この時関心がもたれたのが、当時隣接した小出村下寺尾にあった寺院跡、いわゆる七堂伽藍跡の存在であった。

鶴田は、たびたびこの七堂伽藍跡に言及し、夫人らとともに和歌や俳句を詠んでいる。礎石を確認し、瓦を採集し、五輪塔や板碑、青銅製灯明皿にも注目し、伝説や、地名も根拠として寺院の存在を説き、茅ヶ崎だけでなく、相模の文化の曙光の地であると強調した。69歳のとき、

1957（昭和32）年には、同好の志を募り、現地に「七堂伽藍碑」を建立したのである。当時の新聞には、「郷土史に取り組む百人の農夫」とあり、碑には「今後の研究家の訪れるのを待つために他ならない。」と刻まれた。

その時の記念写真を右に示した。写真の前列中央、左から6人目が鶴田である。4人目が考古学資料の収集家として知られた長福寺の庄司隆玄、5人目が下寺尾

から移転したと伝える小和田の上正寺前住職佐々木円月、7人目が郷土会長となった塩川健寿である。鶴田は、1968年に80歳で亡くなった。老人大学で郷土史の講義を開始した直後のことであったという。

今年、この建碑からちょうど40年目にあたる。鶴田は、石野瑛を現地に案内し、発掘調査を計画したが実施には到らなかった。20年ほど後の1978年に、市制30周年を記念した市史編纂事業でようやく試掘調査が実施され、一部が市史などに報告されている。日本窯業史研究所の河野一也らは、奈良時代以前の寺院としており、重要性が深まっている。

1995年に試掘調査の成果をまとめようと「下寺尾寺院跡研究会」が結成された。鶴田は七堂伽藍を法隆寺式と考えたが、法起寺式の可能性も強くなってきた。市制50周年の今年、報告書としてまとめ、鶴田らの期待に応えんとしている。

（岡本孝之）



「七堂伽藍跡」碑建立記念写真（1957年12月15日撮影）

第20回神奈川県遺跡調査・研究発表会が茅ヶ崎市にて開催される

心配された台風も前夜のうちに通りすぎ、台風一過の晴天に恵まれた9月23日、第20回目の節目になる神奈川県遺跡調査・研究発表会が茅ヶ崎市市民文化会館で開催されました。ちょうど茅ヶ崎市居村B遺跡で出土した「茜木簡」に関する新聞記事が掲載されたこともあり、会場には約450名を優に超す大勢の人達が出席されました。

主催者の神奈川県考古学会寺田副会長と茅ヶ崎市教育委員会渡邊教育長の挨拶の後、前年度注目された遺跡11ヶ所についての発表が始まりました。本年度は発表と並行して、会場ホールにおいて開催地茅ヶ崎市の遺跡紹介が写真パネル展示によって行われまた、前日公表された「茜木簡」の実物も展示されました。

発表は、はじめに開催地でもある茅ヶ崎市西久保遺跡群について富永富士雄、宮下秀之、藤井秀男、木村より報告を行い、相模川によって形成された自然堤防上に立地する当遺跡群におけるここ数年間の成果を述べ、本地形においては弥生時代中期から活動がみられ、弥生時代末から古墳時代前期には集落が形成されたこと、その後古墳後期、奈良・平安、中近世、近現代まで連綿と活動が行われていたことを明らかにしました。次に、小田原城下・欄干橋町遺跡について山口剛志氏より発表がありました。多数の遺構の重複関係より出土した遺物の変遷が検討でき、とくにかわらけの小田原編年における空白期が埋まっていく可能性が指摘されました。3番目は、海老名市No47遺跡について、瀬田哲夫氏より報告があり、県内でもあまり例のない水田址の調査において、少なくとも13世紀以降の4時期の水田面が確認されており、今後の成果検討が注目されます。4番目には、鎌倉市北条小町邸跡の調査成果が馬淵和雄氏より発表されました。それによると、若宮大路の幅が確定したこと。鎌倉時代初期から中世後期の若

宮大路側溝の変遷がつかめたこと。出土した木簡により、労役負担の実態が把握できたこと。中世都市の水洗便所の例が得られたことなど多くの成果が上がっています。

午前の最後には、国立歴史民俗博物館の平川南教授による記念講演「古代文字資料の現状について」が行われました。このなかで、墨書土器に見られる文字は、種類がきわめて限定され各地の遺跡で共通していること、字形も各地で類似していること、などの分析から、従来から言われていた文字の普及度を示すものではなく、いわゆる賄賂（まいない）行為を実施していたことを伝えていると論じられました。また、ヘラ書き文字の筆順が何通りにも観察されることなどから、文字の習熟度についても低かったことが判断できるとされました。さらに、茅ヶ崎市居村B遺跡で出土した「茜木簡」について触れられ、本地域における産業を知る上での重要な資料であることを述べられました。

記念講演の後、昼休みとなりましたが、今年は特別に速報発表という形で、この時間を利用して、林原利明氏より鍛冶工房跡として注目をされている平塚市坪ノ内遺跡の調査状況を発表していただきました。南関東では初めての発見で、いわゆる連房型の官営鍛冶工房跡と呼ばれるものであり、相模国府を考える上でも重要な資料であることを強調されました。今後の成果検討に期待がかかります。また、会場ホールにおいては、レプリカをはじめ関連資料を展示していただきました。

午後最初の発表となった5番目には、横浜市藪根不動原遺跡について横山太郎氏より報告が行われ、瓦塔、浄瓶、鉄鉢形土器など寺院との関わりを考えられる資料がみられることから「村落内寺院」の可能性があることが指摘され、合わせて、本遺跡の奈良・平安期を考える際には官衙遺構、富裕層の住居

なども視野に入れる必要性を説かれました。6番目には、平塚市沢狭遺跡について戸田哲也、小林義典、香川達郎氏が発表されました。調査の結果、古墳時代の遺物集中祭祀遺構が確認され、水場祭祀の場として注目される遺跡であることを説明されました。次の7番目には、小田原市羽根尾横穴墓群について田村良照氏から報告があり、一つの谷戸を共有する群については、構造、附帯施設、出土遺物の検討で造墓活動のあり方が明らかになるとし、さらに一部から検出された火山灰による分析によっては墓前祭祀の終焉、盗掘開始時期などが解明される可能性があることを述べられました。

ところで、発表と同時に行われた文献交換会も13団体の参加を得て、活発な情報交換が行われました。

休憩を挟んで8番目には、三浦半島を代表する弥生時代の遺跡である三浦市赤坂遺跡について中村勉氏より発表がありました。15次以上に及ぶ調査をとおして、巨大住居を持つ集落で、方形周溝墓も大型であること。出土する遺物のなかに青銅製品、磨製石剣など特殊なものがあること。水稻耕作のほかに狩猟、漁労なども組み込んだ内容の経済的基礎であったことが窺えること。さらに、相模湾との関係が強かった可能性があることなど多くの成果を説かれました。9番目には津久井町青根馬渡遺跡群No.4遺跡の報告が河野喜映、池田治氏より行われました。縄文時代から近代までの複合遺跡であることが確認され、このなかでも、縄文草創期における津久井郡内初めての土器資料が得られたことや、縄文後期の柄鏡形敷石住居址に関して、環礫方形配石は住居の柱が立っている時点には置かれていること、周堤礫は住居廃絶後に配置されていることなどの新知見が加えられたとして今後の柄鏡形敷石住居址の施設構造と性格の問題について検討する際の資料と成り得ることなど多くを指摘されました。10番目は、横須賀市大塚東遺跡について、大坪宣雄、北爪一行氏によって発表されました。先土器時代、縄文時代、中近世の複合遺跡である大塚東遺跡のなかにおいて、とくに、先土器時代について、今回の調査では、台地斜

面という立地状況や推積状況から層位確認では十分な結果がえられなかったものの、三浦半島における当該期の遺跡調査が少ない中、本地域の先土器時代を考えるうえで重要な資料であると報告されました。そして最後の発表になった11番目では、茅ヶ崎市臼久保A遺跡について、松田光太郎、田村裕司、井辺一徳、阿部友寿氏によって発表されました。縄文、弥生、古墳時代、近世の複合遺跡であることが確認され、この内、弥生時代においては後期の集落がV字溝に囲まれた状況で発見されたこと。また、古墳時代においては横穴墓と市内では少ない高塚古墳が確認されたこと。さらに、近世において畝状遺構、段切状遺構などの耕作地をうかがえる内容がみられたほか、頭蓋骨を鍋で覆った墓が確認されたことにより墓制を考えるうえで注目されることなどが報告されました。

発表修了後、後援という形で開催に協力いただいた茅ヶ崎市文化振興財団の角田事務局長より挨拶をいただき、最後に、県考古学会の伊東先生より閉会挨拶があり無事に日程を終了することができました。

日程終了後、恒例の懇親会が行われましたが、今年は店を貸切り、発表者をはじめとして72名が参加しました。お酒で口の回転が良くなったせいも、昼間に負けない盛んなやりとりが行われました。またこの席上、次回開催地についての話が交わされ、満場一致で小田原市を推薦することとなりました。

(大村浩司)



横浜市歴史博物館特別展

縄文文化誕生

—都筑区花見山遺跡が解き明かす最古の土器文化の謎—

横浜市歴史博物館では、昨年の10月5日から11月24日まで、「縄文文化誕生—都筑区花見山遺跡が解き明かす最古の土器文化の謎—」と題する特別展を開催しました。

花見山遺跡は、1977～78年に発掘された日本列島有数の縄文時代草創期の遺跡です。本特別展は、その調査成果がこのほど報告書にまとめられ、同時に出土資料が横浜市指定文化財となったのを機に、その成果や資料を皆様にお知らせすることを目的として企画されました。

開催にあたっては、花見山遺跡の出土資料をできるだけ多く公開すること、そして日本列島各地及び東アジアの関連資料を可能な限り借用し展示することを目指しました。それは、花見山遺跡出土資料の持つ意義を、広い視野の下で、皆さんと一緒に考える場を作りたいと考えていたからです。

私は、単にこれまでの研究成果を公開するだけでなく、地域の資料の持つ意義を考える場を準備することも、地域博物館の役割と考えます。そのような展示によって、その資料をめぐる研究が活発になれば、それは地域の歴史研究にとって大きな財産になるからです。

このような主旨の下、青森県から鹿児島県、ロシア、朝鮮半島におよぶ85遺跡、約2600点に及ぶ資料を展示できたことは大きな喜びでした。もちろんこれは特別展にご理解をいただいた、多くの方々のご協力の賜物です。今回の展示を機に、花見山遺跡出土資料及び縄文時代草創期をめぐる研究が一層活発になることを願ってやみません。

なお、あわせて作成した『縄文時代草創期資料集』は、このたび増刷いたしましたので、購入希望の方は、博物館にてお買い求めください。

(安藤広道)

考古学講座開催される

平成8年度の考古学講座が去る3月9日(日)にかながわ県民センターにおいて開催されました。

今回のテーマは『かながわの弥生時代の社会—後期の環壕集落から考える—』です。

近年県内で弥生時代後期の小規模な環壕集落の調査事例が急増しています。これらの集落からは東海系土器が少なからず出土しており、倭国大乱について神奈川からも何か言及できないかというのがこの企画の原点でした。

講座は主旨説明に続き、4地域に分けた県内各地の状況について触れられ、高地性遺跡・土器の移動という観点からも発表がありました。また興味深い2遺跡の概要についても、スライドを中心に報告されました。発表終了後に質疑を受け、さらに今後の課題・問題点をあぶり出すための討議の時間を1時間半ばかり設けることができました。

発表者の方々は一般会員のための講座であるということ深く認識され、最先端の研究の現状を平易な言葉で説明することに心を砕いていただきました。そのせいか200名に近い参加者はメモを取りながら熱心に受講されていました。

終了後アンケートを読まさせていただくと好意的な回答が多く、関係者一同胸をなで下ろしております。なお、秋には今回の成果集を刊行する予定です。

(伊丹 徹)



相模原市立博物館の見学会に参加して

3月22日、今年度最後の相模原市立博物館見学会に参加しました。相模原市立博物館は既に一度観覧しましたが、今回は学芸員の大貫英明さんに懇切なご案内を頂きました。夫々の展示品の選択は申すまでもなく、常設展示については行届いた解説書が用意され、入館者に相応しい展示に留意して運営されています。私たちが関心を持つ考古部門では地質の説明から始まり動物・植物の進化と盛衰を示しながら現在までの人の暮らしの変遷までを実物の展示とともに、その実物に手を触れて実感できるように配置されています。今後の活用拡大は、若い世代と共に、社会全般への啓蒙に役立つものとなるでしょう。

有名な勝坂遺跡から出土し、太平洋戦争の戦災で失われた土器（顔面取手）のホログラムは小学生に考古遺物への関心を持たせると共に愛郷心を培うことになるでしょう。

相模原市の市域は地勢水利に恵まれ太古より人の生活に適応してきましたが、近世に開発がすすむと共に土地に刻まれた歴史が忘れられ、さらに明治以降の社会の大変化とさらにその後の軍事的利用の急激拡大と太平洋戦争後の人口増加により現況は大きく変貌しました。土地に刻まれた歴史の再確認は市民に郷土意識を喚起の機会であり、そのチャンネルとして博物館が果たす役割は大きいでしょう。この見地から今回ご案内頂いた相模原市立博物館の設備は充実しており、今後の運営は新しい社会環境の整備充実に貢献するものと期待致します。

当日ご多用中にも拘らず館内全般及びこれからの整備運営について懇切にご説明頂きました大貫さんに重ねてお礼申し上げますと共にこれからのご奮闘をお祈り致します。（安東健一）



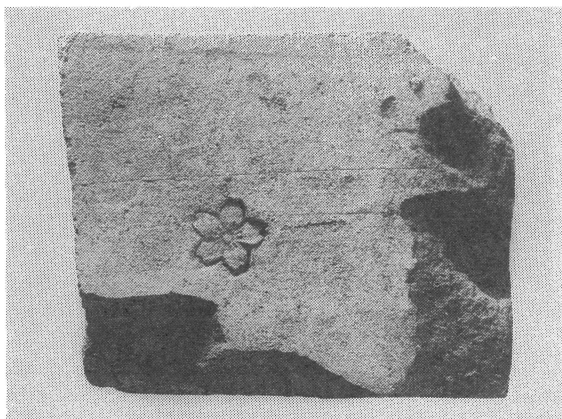
煉瓦について

煉瓦は、土を天日や火で固めたもので、比較的容易に作る事ができたため古くから用いられた。例えば、エジプトでは建築資材として日干し煉瓦が存在するし、中国では磚と呼ばれ建物に使用された。わが国でも平城宮の基壇部にこの磚が使用されている。

一般的に煉瓦には、赤煉瓦と白煉瓦（普通耐火煉瓦と呼ばれる）がある。赤煉瓦は東京駅をはじめとする建物の建築資材として盛んに用いられた。現存する横浜新港埠頭煉瓦倉庫は有名である。また、明治期に着工、関東大震災により倒壊した相模川の橋脚及び橋台も水量が少ない場合は、容易に観察できる。赤煉瓦は震災以後、コンクリートや鉄に主役の座を奪われたが、独特の味わいは赤煉瓦＝明治のイメージを未だに色濃く残し、私たちの身近に生きている。

一方、耐火煉瓦は赤煉瓦と異なり、特殊な耐火土を必要とし、名前の示すように火に関係があり、焼成炉や陶磁器の窯等に用いられるが、広く知られているものに、伊豆韮山の反射炉がある。身近な例では、暖炉や長火鉢の底等をあげることができる。

両者は、最近では発掘調査により出土する機会が増えたが、古き良き時代を偲ぶ一品であるとともに、わが国の勃興期における産業の発達を示す重要な遺物でもある。（鈴木一男）

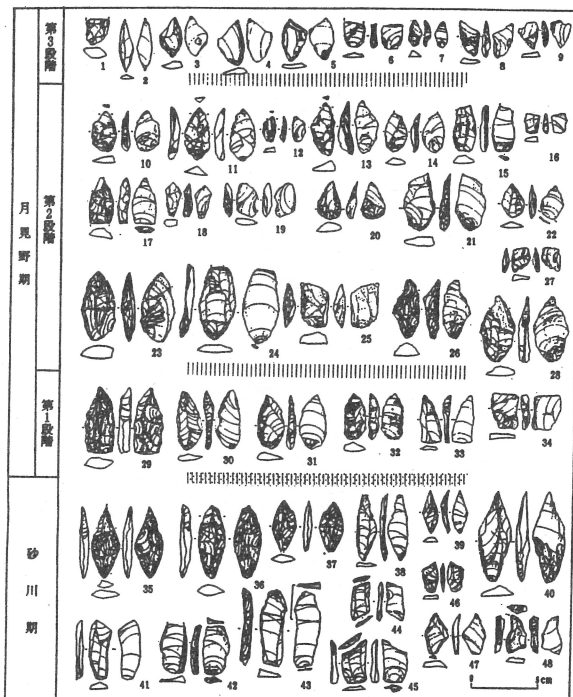


神明前遺跡 赤煉瓦（桜の刻印）

月見野期のナイフ形石器

今から約27,000～15,000年前の後期旧石器時代はナイフ形石器が卓越します。このナイフ形石器は当初ナイフの身のようなかたちをしていたことから呼称されました。今から約18,000年前には茂呂型ナイフと呼ばれた縦に長い柳葉形の二側縁加工のナイフ形石器、一側縁加工、基部加工、そして平行四辺形の端部加工のナイフ形石器が多く作られました。これらの石器に伴って木葉形尖頭器や桶状の剥離をもつ尖頭器が少量伴うもので、砂川期の石器群と呼ばれています。この石器群の素材は定形的な剥片を生産する石核として両端に打面を設けていました。

しかしこの時期に続く石器群は幅広く、寸づまりの剥片を用い台形、三角形等の幾何形のナイフ形石器や多量の寸づまりの石槍が製作されるようになります。特にナイフ形石器と石槍は同一個体で形成される例が目立ち、斉一的な大きさの石器で構成されるようになります。このナイフ形石器はおそらく組み合わせ道具として用いられたものと推定されています。(白石浩之)



平成9年度総会と報告会のお知らせ

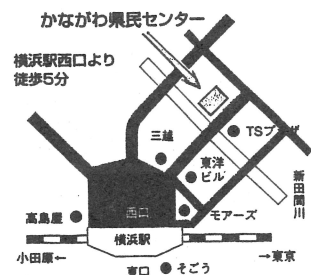
平成9年度総会と報告会を下記のとおり開催いたします。

- 1 期 日 平成9年6月7日(土)
13時30分から17時まで
- 2 場 所 かながわ県民活動サポートセンター
301号室
- 3 内 容 1時30分 (1) 総会
3時00分 (2) 仮称『昨年度におけるかながわ県下の考古学成果』報告会
① 旧石器時代
② 縄文時代
③ 弥生時代
④ 古墳時代
⑤ 奈良・平安時代
⑥ 中世・近世
- 4 備 考 平成9年度から会員の総会参加を積極的に促す意味において、試行で仮称『昨年度における神奈川県下の考古学成果』を行います。各時代の主要な発見や問題点など図やスライドを含めてわかりやすく報告したいと考えています。是非ご出席くださるようお願い致します。

かながわ県民活動サポートセンター

〒221 横浜市神奈川区鶴屋町2-24-2
かながわ県民センター内

TEL. 045-312-1121 (代)



会 員 名 簿

<住 所 変 更>

1997年 2 月15日現在

安藤 冴子	
岡田 義樹	
勝山 百合	
境 雅仁	
坂口 滋皓	
田中 裕子	
中山 浩彦	
西井 幸雄	
東野佐和子	
松本 完	
渡辺 新一	

<新 入 会 員>

香川 達郎	
城田 正明	
長縄美智子	
藤井 秀男	
宮本 文雄	
山本 薫	

特別展 「ミクロネシア -南の島々の航海者とその文化-」

大田区立郷土博物館～6/15(日) ㊦ 月

講演会 5/4(日)・5/11(日)・5/18(日)

考古学講座「弥生土器は私たちに何を語りかけるか」

(財) かながわ考古学財団 7/26(土)、往復はがき申し込み

お知らせ

- ① 平成9年度研究誌『考古学論叢 神奈河』第7集について、執筆ご希望の方は8月末日まで研究誌担当の川口（神奈川県立博物館045-201-0926）までご連絡ください。
- ② 総会の講演については、今年度お休みいたします。総会後の行事として今年度仮称『昨年度における神奈川県下の考古学成果』を試行してみました。是非会員拡充をはかる点からも、会員外の方にも参加くださるようお願いいたします。

編集後記

今年は桜が早く咲きました。やはり桜は入学式の頃が一番です。しかし考古かながわを早咲きのように、出そうと思ってもなかなか咲きません。編集者の年齢はともかく「考古かながわ」を桜のようにありたいといつも考えている今日この頃です。

伊東さん、岡本さん、大村さん、鈴木さんから玉稿をいただきました。

ありがとうございました。

みなさんから積極的なご意見、提言をお待ちいたしています。白石までご連絡ください。

(045-261-8162)

考古かながわ 第12号

発行 神奈川県考古学会
 発行日 1997年 3 月31日
 編集者 明石 新、大塚真弘、後藤喜八郎
 白石浩之、松尾宣方
 事務局 東海大学文学部考古学研究室内
 〒259-12 平塚市北金目1117
 郵便振替 00240-9-71208
 神奈川県考古学会
 印刷所 有限会社長谷川印刷